

松山市で講演会「IoT/AI活用時代のビジネス創造」を開催 《情報通信技術・人工知能をビジネス改革に活かす戦略を語る》

総務省四国総合通信局(局長:吉武 久)は、四国情報通信懇談会との共催で、平成30年4月27日(金)に愛媛県松山市で「IoT/AI活用時代のビジネス創造」と題した講演会を開催し、自治体、企業などから120名が参加しました。

講師には、一般社団法人情報通信技術委員会事務局長(元総務省大臣官房審議官)の稲田 修一氏をお招きしました。講演の要旨は次のとおりです。

【IoT/BD (ビッグデータ) /AIの台頭で、今、社会で何が起きているのか】

IoT/BD/AIの台頭により、ビジネスの世界にパラダイムシフト(創造的破壊)が起きており、既存ビジネスが生き残るには、新たな価値を創造することが必要。例えば世界中の既存オーディオ市場が縮小傾向にある中、音楽ストリーミングサービスは拡大。

【IoT/BD/AI活用を進める中で分かること】

わが国のIoT/BD/AI活用の実態として、データ収集に多大な労力が必要であることを理解せず、ICTベンダーに丸投げすれば新たな価値が創造できると誤解している企業が多数。企業自身が自社の課題解決に向けてデータを収集し、それを分析する組織力を身につけることが重要。ICTベンダーはそのサポート役。

例えば、ある農機メーカーは、圃場ごとに米の「収穫量」、「タンパク含有率」、「水分率」のデータを収集するシステムを開発し、収集したデータを分析することで圃場ごとの施肥量を最適化するなど、他社が提供していない価値を実現。

【パラダイムシフトへの対応法】

IoT/BD/AI活用時代のパラダイムシフトに対応するには、「事前に綿密に検討してから始める」のではなく、「走りながら考える」ことが必要。関連情報を調べ、現場に出向き、アイデアを結合して実証・展開するという「デザイン思考のプロセス」を導入することが有効。

【まとめ】

オペレーションと異なり、イノベーションは先読みが困難。失敗を恐れずに挑戦することが不可欠。マネジメントの役割は、挑戦に向けたリーダーシップと失敗を許容する環境や風土の実現。ピーター・ドラッカーも「未来を予測する最良の方法は、未来を創ることだ。」とコメント。

参加者アンケートでは「やる前に詰めるのではなく、まずは現場に出向く重要性がわかった。」「顧客の課題解決のヒントを得た。」などの声が寄せられました。

(主催)総務省四国総合通信局、四国情報通信懇談会

(後援)厚生労働省愛媛労働局、経済産業省四国経済産業局、四国経済連合会、松山商工会議所



一般社団法人情報通信技術委員会事務局長
稲田 修一 氏



講演会の模様

(お問い合わせ先)

情報通信部 情報通信振興課 089-936-5061